

# 「17才たち、海に沈む弾丸」

かわしま かつみ

## 登場人物

松浦 潤[ジュン](17) . . . 高校3年生

田中紗加[サヤカ](17・15) . . . 同

榊原 直[ナオ](17) . . . 同

速水剛志[ツヨシ](17) . . . 同

速水 健(44・34) . . . 剛志の父・神奈川県警察署・警部

速水正一郎(68) . . . 剛志の祖父・元刑事

速水千代子(67) . . . 剛志の祖母・元音楽教師

松浦組長(44・34) . . . 潤の義理父（叔父）

田中美津子(38・36) . . . 紗加の母・スナック経営

榊原健一 (46) . . . 直の父・エリートバイヤー

榊原由美子(42) . . . 直の母

山本 (20) . . . 大学3年生

風間先生(52) . . . 高校教師

森田(27) . . . 神奈川県警察署・巡查長

課長(53) . . . 神奈川県警察署・課長

橘 (25) . . . 松浦組組員

剣崎(28) . . . 同

無限 (36) . . . 星流会ボス

キム (33) . . . 無限の愛人

ヘリコプター操縦士

海上保安士

巡視艇船長

松浦組漁船の船長

【回想】

速水優子(32)・・・速水健の妻

西(35)・・・白龍組・組員

東(28)・・・白龍組・組員

兄の妻(35)・・・元松浦組長の妻

松浦 潤 ・・・ 7才～8才の時

速水 健・・・・・・小学3年

松浦組長・・・・・・小学3年

○悪夢（イメージ）

男 「勝手に触るな！」

殴られる青年。

男 「云ったことだけ遣ってリヤいいんだ」

蹴られる青年。

男 「誰に飯、喰わしてもらってるんだ！ええ！」

連打され崩れる青年。

○老朽化した近郊住宅街（神奈川・浦賀）

初夏一、昼下がり。

バックを抱え、汗だくで駆けて来る潤（17・高3）。

○ 同 ・ 小さな公園（第1緑公園）

直のスマホを覗き込む、剛志と紗香（3人、17・高3）。

RPGバトルゲームの画面。

来る、

潤 「紗加、持っとけよな、携帯」

紗加 「（見つめ）どうしたの、その顔」

潤 「知らねえよ」

紗加 「（心配気に）またなの……」

潤 「いいから。連絡とれねえじゃん」

紗加 「また、されたんだ」

潤 「されてやったんだよ。それよか、持っとけよ」

紗加 「嫌なの。うるさくて」

潤 「……（顎で示す）そいつらは？」

立ち上がる剛志と直。

紗加 「友達」

潤 「居たんだ。そんなの」

紗加 「剛志と直」

微かに首を傾げる二人。

紗加 「で、潤、結構、ワル、でもさ」

潤 「やめとけ」

紗加 「（ムッ！）何か用？」

潤 「来いよ！」

○ 同 ・ 建て替え中の団地棟

仕切板で囲われ、作業員は居ない。

潤声 「かけええだろ」

潤、銃（リボルバー）に弾を込め、

銃身を向ける。

剛志、直、紗加の順に。

潤 「ホンモノだ！」

と、最後に剛志に定める。

剛志 「！」

潤 「お前、どこかで、見たな」

剛志 「知らないよ」

潤 「そうか……」

直 「銃、危ないよ」

直に向ける。

直 「！」

紗加 「よしなよ、潤」

剛志 「悪フザケでもヤバイよ！」

潤、狙いをゆっくり剛志に戻し、

潤 「悪フザケでもヤバイよってか」

剛志 「ヤバイよ」

潤 「誰にモノ云ってんだよ」

剛志 「キミに」

潤 「紗加。キミだつてよ」

紗加 「いいから、仕舞って」

潤 「（無視）学校、どこナンだ？」

剛志 「浦賀南港高校」

潤 「へえ～？何組」

剛志 「3年3組」

潤 「アウ！一緒じゃねえか。紗加、  
こんなヤツ居たか？」

紗加 「私は2組、知らないわよ」

潤 「そつか、オレ、行ってねえしな。  
名前は？」

剛志 「だから、剛志、速水剛志」

潤 「で、オメエは？」

直 「浦賀プール学園、3年B組、榊  
原直」

潤 「お坊ちゃんか。オレは松浦潤つ  
て云うんだけどよ……」

剛志 「紗加さん、悪いけど、帰っていい  
かな」

潤 「！？」

咄嗟に剛志の腹に銃を挟らせる潤。

「オメエ、人の話の腰折ってさ、な  
んとも思わねえのか」

剛志 「（睨む）……」

紗加 「潤、やめて」

潤、紗加に銃を向け、  
紗加 「そんな事するんなら、帰って！」  
潤 「帰んねえ！」  
紗加 「何、言ってるの！」  
潤 「家には帰んねえ、二度と！」  
再び、直、剛志に銃を向ける。  
潤 「剛志だっけ、キモ試ししようか」  
潤、弾倉を回転させ、耳元で聞き、  
弾倉を覗く。  
剛志 「（睨んでいる）」  
潤 「大丈夫。心配すんな」  
直 「ダメです。飛び出ちゃったら、大  
変ですよ……」  
潤 「一発しか入ってねえからさ」  
構える。  
剛志 「（睨み据えている）」  
紗加 「やめて！」  
直 「……」  
潤 「3、2」  
剛志 「（震え出す）」  
紗加 「ダメ～！！」  
潤 「（声で）バーーン！」  
剛志 「クソーッッッ！」  
勢い良く、飛び掛かる。  
潤 「！？」  
ドキューーン！  
倒れる剛志。  
直 「！」  
紗加 「！」  
潤 「！？」  
震えてる銃。  
直 「アーアッ！」  
紗加 「潤、潤、どうして？」  
潤 「と、飛び掛かって来るからさ、咄  
嗟に、握っちゃったんだよ」  
銃を眺める潤。  
足元のバックから数丁の銃と弾丸  
が飛び出てる。  
紗加 「どうすんのよ？」  
潤 「そんなもん……」  
紗加 「ねえ、どうすんの？」  
潤 「とにかくさ、アイツをさ」  
一人で死体を引っ張り始める、潤。

見ている紗加と直。

直 「僕、知らないから」  
潤 「ツベコベ云わず、手伝え！おい、  
紗加！」

紗加、威圧感で従う。

直 「いけないよ、そんなの」  
潤 「黙れ！サッサとやれ！」  
直 「なんで？」

潤、銃を直に向ける。

直 「アウ！アワワワッー」

紗加 「潤！」

潤 「（直に）早くしろ！」  
潤、剛志の身体を弄り、スマホを抜き取る。

### ○キラキラ輝く海

設営中の海の家の裏側に潜む3人。

直、スマホを取り出す。

間髪入れず取り上げる、潤。

直 「アッ！」  
電源を切る。

直 「ああ……」  
紗加 「何すんの、返してやって」

潤 「ヤバイんだよ」  
直 「僕のなんだ、返してくれ！」

潤 「使われちゃマズイんだよ」  
紗加 「依存症なのよ」

潤 「だったら、治せ！」  
紗加 「返してやって」

直 「頼むよ、お願い。使わないから、  
頼むよ」

紗加 「潤、返してやって」

潤 「ダメだ」  
頭を抱え込む直。

直 「ウッウッウッ、何で……」

紗加 「潤……」  
エンジン音が響いてくる。

潤 「！（囁く）黙ってる」  
覗く。

× ×

後方の松林に止まるランクル。  
慌ただしく老夫婦が出てくる。

× ×

身を潜める3人。

潤 「絶対、動くな！」

× ×

バシーン！

正一郎（68・元刑事）が千代子（67・元音楽教師）の頬を打つ。

正一郎 「ふざけるんじゃない！」

千代子 「（頬抑えながら）うんざり……」

正一郎 「離婚。なぜだ、千代子！やっと、余生をゆっくり、小笠原で過ごせるっていうのに……なぜ、千代子……」

千代子 「……重いの……あなたが」

正一郎、手を挙げる。

飛び出す潤、その手を捻り挙げる。

潤 「やめろ！」

すかさず、銃を突きつける。

正一郎 「！？」

千代子 「！？」

続いて来た、紗加と直。

紗加 「潤！」

直 「ダメですよ！」

潤 「（無視）悲しいな、オッさん」

正一郎 「（窺ってる）」

潤 「オッさん、人って信じられるか」

正一郎 「……」

潤 「オッさん、どうなんだ」

正一郎 「サー、銃を降ろしてくれないか」

潤、正一郎の腹を銃で挟む。

潤 「ウッセーんだよ！どうなんだ。

信じられるかって聞いてんだよ」

正一郎 「どうだか」

潤、銃を顔に突き付け、

潤 「どうだか？」

銃身をグイグイと押し付ける、

潤 「調子に乗るな。答えろ！」

正一郎 「時と場合だ」

潤 「またまた、懲りねえオッさんだ」

腹に2、3発、膝蹴りを喰らわす。

折れる、

正一郎 「（見上げ、睨んでいる）」

潤 「（銃を向け）どうなんだ？」

千代子 「……」

正一朗 「信じたい」  
潤 「ウワッハハハ、虫酸が走るぜ！」  
と、蹴り倒す。  
倒れ込む正一朗。  
潤、正一朗を狙ったまま、  
千代子を強引に引き寄せる。

正一朗 「何するんだ。放すんだ！」  
潤 「テメエが偉そうにするからだよ。  
人質だ。俺たち、あんたらの小笠原に行く」  
紗加 「何、云ってんのよ！潤！」  
直 「ええー、どうなってんの……」  
潤 「ウルセー（二人を睨みつける）」  
その一瞬、正一朗は飛び掛る。  
揉み合う二人。  
バァーン！銃が暴発。  
弾丸が正一朗の側頭部を微かに抉る。  
倒れる正一朗。

千代子 「（駆け寄る）あなた……」  
潤 「クソッ！オメエが悪いんだよ」  
紗加 「！」  
直 「！」  
潤、正一朗の衣服を探り、携帯を取り出す。  
潤 「（千代子に）携帯出しな！」  
受け取る潤。

#### ○走るランクル

覚束ない千代子の運転。  
不安げに乗ってる3人。  
× ×  
通りで、買い物袋をぶち撒け、  
妻（29）と息子（7）に罵声を浴び  
せ、殴る、蹴るの動きが止まらない  
夫（31）を見かける。

潤 「止めろ！」  
潤、夫に飛び蹴りを喰らわし、殴り  
蹴り倒し、ぶち撒けられた商品を集  
め、妻に渡す。  
見ていた、直、紗加、そして、

千代子 「……」

#### ○正一朗宅・表（浦賀）

表札『速水正一朗』

前庭に止まっているランクル。

○ 同・中

飲料水、食料、必需品を集める直と  
紗加。

金を漁る潤。

千代子は胡弓を抱きしめている。

潤 「(気づき) おばさんよ。そんなモ  
ン持って行かぬえよ」

○海岸・松林

正一郎、血まみれの頭を抱え、息を  
吹き返すが再びグッタリと沈む。

○松浦組工務店・表

松浦・声 「分かってんな、テメえら、倅と  
いえども容赦しねえ」

○ 同・中

事務机だけの殺風景な室内。

組員6名に吠えてる松浦組長(44・  
潤の義理の父)。

松浦 「アイツをしょっ引いて銃を取り  
返せ! テメえら」

○アパート「フラワーハイツ」・2階建(表)

○ 同・中(2F)

出勤前の身繕い中に、田中美津子  
(38・紗加の母)が吐気を催す。

美津子 「あーあ、やっちゃった。墮ろさ  
ないと。(物音を感じ) 紗加？」

と、見回すが誰もいない。

「気のせいか……」と出て行く。

数個のカップラーメンの残骸。

○高層ビル・オフィス・一室

PC、見ながら、笑顔でスマホに語  
っている、榊原健一(46・直の父)、  
アパレルのエリートバイヤー。

榊原 「大事に使ってたからさ、頼むよ。  
そう、葉山マリンハーバー。で、いつチェ  
ンジなの……2週間、そうか……仕方ない

な、待つよ。楽しみだな、じゃ（切る）」

画面には新型クルーザー。

榊原 「（スマホに）僕だ、今日は泊まりだ。すまん」

○榊原邸・表

打ちっ放しの壁に囲まれた邸宅。

○ 同・中

鏡を前に妻、由美子（42）、

「そうね、じゃ、私も……」

スマホを切り、化粧を続ける。

『直くんへ ゴメンね！パパもママも、お泊まりなの。いつものようにチン！して食べてね』

一枚の紙片が置かれている。

○葉山マリンハーバー（黄昏）

ランクル止まり、降りる一同。

潤 「スゲー！な、紗加」

大型クルーザー。

紗加 「ほんとー、すご〜い！なのに、

どうして、直は……（振り向く）」

居ない。

紗加 「直！」

突っ走る直。

潤 「！」

銃を構える、

潤 「直、止まれ！撃つぞ！」

直、止まるーーー。

ゆっくりと近づく、潤。

潤 「こっち向け」

殴る潤。

屈み込む直。

紗加 「潤！ヤメて！」

× ×

キーを廻す、千代子。

ブローロー！エンジン始動。

振り返る、

潤 「紗加、止めろ！」

紗加、駆けて行く。

直も走り出す。

潤 「クソッ！」

× ×  
紗加、震える千代子の手を掴む。  
紗加 「ゴメン」

× ×  
狙いを定めている潤の銃。  
潤 「ナオ〜！」  
バーーン！  
立ち止まる直。  
紗加 「！」  
千代子 「！」  
直 「ハッ!？」  
身体中を弄る。が、異常ない。  
駆けて来た潤、直を殴り倒す。

潤 「逃げるな！」  
直 「僕は悪くない」  
胸ぐらを締め上げる。  
潤 「ワケねえだろ。お婆はん拐って  
さ、おっさんもヤッチャったんだぜ。共犯じ  
ゃん」  
直 「嘘だ嘘だ。お前が全て悪いんだ。  
僕と紗加は何もしちゃいない」  
潤 「うるせえんだよ」  
潤、直を殴り、痛めつける。  
駆けつけた千代子、潤の腕を掴む。  
千代子 「……アア（喋りたそうだが声に  
ならない）」  
潤 「退いてろ！」  
と振り解き、直の首根っこを掴む。  
転げる千代子を庇う、紗加。  
紗加 「もう、止めて！潤！」  
潤、手を緩め、  
「直、よく聞け。お前んちのクル  
ーザーで逃げるんだ」  
直 「（嗚咽）」  
潤 「もう、戻れないんだよ。お前も  
紗加も一緒だ。判ったか」  
再び、蹴り上げる。  
直 「ウグッ！」  
紗加 「潤、もう、よして！」  
潤 「判ったなら、操縦しろ」  
直 「……出来ないよ」  
手を挙げる潤、退く直。  
潤 「ウソコケ、マジかよ」

直 「ホントです。出来ないよ」  
徐に千代子、ハンカチで直の血を拭  
ってやる。

直 「(千代子に目を遣る) ……」

千代子 「……(見つめている)」

紗加 「……」

○ 同 ・ ある棧橋から(日没)  
対岸で吐いてる若者(ヨット部のユ  
ニフォーム)。

潤、直の背を叩き、

潤 「行け」

若者 「グウエーツ……」

立ち上がり千鳥足で来る若者。

直 「大丈夫ですか？」

若者 「!……飲みすぎちゃって……」

直 「送らしましょうか」

若者 「いえ……グウエーツ……」

背を摩り、肩を貸す、直。

若者 「あ、ありがとう」

潤 「(来て)直!チンタラするな!」

若者を掴み上げ、

潤 「オイ、ヨット部!」

若者 「な、なんですか?」

ビンタ張り、

潤 「船、動かせるか?」

山本(20) 「(呂律回らない)失礼な。僕は海  
洋大、ヨット部の山本だ。当たり前だ」

潤 「じゃ、行こう」

山本 「ど、どこへ、グウエー……」

潤 「いいところ」

山本を挟み、連れて行く。

潤 「直、逃げるなよ」

○近郊住宅街・建て替え中敷地内(日没)

2人の影が蠢いている。

女 「冷んやりしてて気持ちいいイ」

男 「いいだろ。じゃ、ここは、どう」

女 「アハー、ちょっと、そこ、イケな  
い、感じちゃ……ウー」

男 「チュウチュウ」

2人、纏れ合い乍ら倒れこむと、捲

れ上がった青いシートから剛志の屍  
顔が覗いている。

女 「キャーア！！！」

○海岸沿いの道路（日没）

土手を這い登る正一朗。  
だが、途中で力尽きる。

○クルーザー・キャビン（日没）

食品、飲料水等を片付ける紗加。  
縛られてる千代子。

千代子 「（口をモグモグさせている）」

紗加 「解いてあげたいけどさ。潤が狂  
っちゃうからさ」

乗り込む足音がする。

紗加 「……」

ブルルルン！エンジン音が響く。

紗加 「！」

× ×  
コクピット。

潤 「やるじゃん！行こうか？」

銃を突きつけられ蒼白の、

山本 「ヨルは危ないよ」

潤 「ウルセー！」

山本の身体をチェック、スマホをチ  
ラつかせ、海に投げる。

山本 「あ！あああ〜何すんだよ」

と、海へ乗り出す山本。

潤 「（銃を手に）オイオイ、こっちだ、  
早くしろ！」

来ていた、

紗加 「アンタは素人。言う通りにした  
ら」

直 「ホント、危ないですよ。夜は」

潤 「沖、出るだけだ。行け！」

山本を押し倒す。

○近郊住宅街・建て替え中敷地内（日没）

鑑識が慌ただしく動き廻る。  
横たわった剛志の前、呆然と立ち尽  
くす速見健警部（44・剛志の父）。

速水 「……」

部下の森田 (27)来て、  
森田 「(躊躇し) 胸に一発、即死です。  
今、銃の割り出しを……」  
速水 「ああ……」  
森田 「残念です(行く)」  
速水 「ツヨシ……」

○沖合に漂うクルーザー (夜)

キャビン。  
縛られ眠ってる山本。  
カップラーメンを啜り終わると、  
潤 「紗加、お婆はん、縛ってさ。見張  
っててくんないか」  
紗加 「まだ、食べてるじゃん」  
潤 「欲しかねえみたいだ」  
千代子を確認、  
紗加 「ゴメンね」  
抵抗せず縛られる千代子。  
潤 「直、山本、見張っててくれよな。  
起きたらさ、操縦させるんだ」  
直 「……」  
潤 「直、どうなんだ？」  
直 「ああ(頷く) ……判った」  
千代子を縛り終え、  
紗加 「潤、なんだかんだ指示してさ、い  
いきなもんよね」  
潤 「遊びじゃねえんだ。逃げてんだ」  
紗加 「何、勝手なこと云ってんの。潤の  
せいじゃん…ウチらも巻き込んでさ」  
潤 「お前までそう云うなよ」  
紗加 「だったら優しくして、みんなに」  
千代子 「(見ている)」  
潤 「するよ。するからさ……お婆はん  
の見張り、頼んだぜ」  
紗加 「お婆はん、お婆はんって、まず、  
それ直しなよ。ね、お婆さん」  
千代子 「(口、パクパク動かしている)」  
必死で声を発しようと蠢いている。  
紗加 「!？」  
直 「!？」  
潤 「お婆はん? どうしたんだよ」

千代子 「……（涙が滲む）」  
紗加 「おばさん、声、出ないの？……」  
潤 「嘘だろ」  
直 「ショックで出なくなるって聞いたことある」  
× ×  
回想 弾丸が正一郎の頭を抉り、血が飛ぶ。  
× ×  
小さく蹲る千代子。  
紗加 「おばさん……」  
× ×  
月。  
× ×  
デッキで、  
行きつ戻りつの、  
直 「アー、クソーツ……」  
潤、来て、  
潤 「見張ってろって、云ってんだろ！」  
直、駆け寄り、  
直 「スマホ、返してくれよ！」  
潤 「見張ってろ！」  
直 「頼む」  
潤 「（取り出し）これ」  
直のスマホ。  
潤 「と、これ、剛志の」  
剛志のスマホ。  
潤 「で、これはオレの」  
潤のガラケー。  
直 「早く、返してくれ！」  
潤 「こんなのあるからイけねえんだ」  
3台とも海に捨てる。  
直 「ウワァー！どうして。どうして……」  
海を覗き込む直。  
潤 「これも要らねえなあ」  
老夫婦の携帯（2台）も投げ、  
振り返ると、  
紗加が立っている。  
紗加 「最低……」  
潤 「警察なんか怖かねえんだ。怖いのが怖い」

はアイツだ。逃げなきゃ殺される」

紗加 「アイツ？」

潤 「オヤジじゃねえんだ、叔父だ。ア  
イツは俺のお袋を苦しめ殺しやがった」

行く。

沙加 「……」

満天の星。

× ×

潤、ポケットから別の自分のスマホ  
を取り出し、銃と共にバッグに仕舞  
い、隠す。

○道路沿いの海岸（夜）

犬とジョギング中の中年男、蠢く何  
かを捉える。

「!？」

土手の正一朗、微かな息一。

○神奈川南警察署・捜査一課（夜）

○ 同 ・ 検死室（夜）

シートで覆われた剛志の屍体前で、

速水 「……」

課長 「これからというのに残念だ…」

速水 「……失礼します」

そこへ、森田、飛び込んで、

森田 「警部、警部のお父さんが今、救  
急病院に運ばれてまして」

速水 「!？」

課長 「……」

○港湾南病院・病室（夜）

処置が施され、寝ている正一朗。

速水 「（囁く）父さん……かあさんは、  
かあさん？」

正一朗、臉が微かに動くだけ。

速水 「父さん……」

正一朗 「……ち……ち……」

速水 「うん、どうしたんだい……」

正一朗 「……ち……よ・こ……」

速水 「!？」

速水、スマホを耳に駆け出す。  
呼び出し音だけが鳴り響く。

○正一郎邸・中（夜）

固定電話の

……呼び出し音が止む。

× ×

荒らされた、ダイニングキッチン、  
リビング、そして、千代子の部屋。

速水 「そんな……」

母の胡弓がない。

頭を抱え、鏡に呟いている

速水 「……いったい、なんなんだ！」

○松浦組工務店・中（夜）

組員をどやしつけている、

松浦 「居ねえワケねえだろ。どこかに  
いるんだよ。このバカが！」

橘(25) 「ですがね、居ねえんでさ」

松浦 「まったく、頼りねえ野郎だ。（劍崎  
に）おい、あいつの学校当たったか？」

劍崎(28) 「学校？……苦手で……」

組長 「ダチだよ、ダチ。オメエら、何  
年、組員やってんだよ！もういい！」

○あるホテル・一室（夜）

榊原の上で喘いでる女子社員。

芹那 「ハーアーン、いいわー……」

榊原 「クルーザーでも、乗ってよね」

○別のホテル（夜）

全裸の由美子、スマホを切る。

由美子 「？……」

青年 「出ないの？」

由美子 「電源切れてるみたい……」

青年(26)、乳房から陰部へと舌を這  
わしていく。

○スナック「蜜子」・表（夜）

看板の灯は落ちている。

○ 同・中

啜え煙の美津子の乳房を吸ってる  
白髪の方。煙草を置き、男の股間に  
唇を落として行く美津子。

灰皿の傍にはスマホと数枚の万札。

○クルーザー・キャビン（夜）

膝を抱え、前後に揺れている直。

紗加 「……（囁く）直」

直 「（動き止まり）……！」

紗加 「……」

直 「確認しないとき、スマホでさ」

紗加 「直……」

千代子、体をバタつかせてる。

紗加 「どうしたの？」

千代子、一方に視線を注いでる。

紗加 「（見て）ああ、アレ！」

千代子 「（頷く）」

千代子、縛られた体で弾く真似。

紗加 「弾きたいの……」

頷く、千代子。

紗加 「（潤を見る）でも、潤が…」

潤 「（目を閉じたまま）勝手にしな。

お前に任したんだからよ」

紗加 「起きてたんだ」

潤 「寝れるワケねえだろ」

紗加 「ありがとう」

潤 「ババアなんだからさ、何もでき

やしねえよ。こんなトコだよ」

紗加 「ババアって、よしてよ！」

紗加、縄を解き、胡弓を渡すとき、

刻まれた『千代子』を見て、

紗加 「はい、千代子さん」

千代子 「！（一瞬笑顔が拡がる）」

紗加 「これ、なんて云う楽器？」

千代子 「（口をパクパク）」

紗加 「あ、そっか。ごめん」

千代子 「（頷く）」

千代子、胡弓を奏でる。

優しい音色がキャビンに流れる。

紗加、直、潤の顔。

○速水宅・仏間（夜）

妻に手を合わす速水。

「速水優子（32）の遺影」

○同・剛志の部屋（夜）

机、棚などを調べ、  
手懸りを探す、

速水 「……」

袋から3冊の真新しいRPGゲーム  
の攻略本が出て来る。

裏には、3冊とも、  
「Nao Sakakibara」の文字。

速水 「ナオ サカキバラ……」

携帯を取る、

速水 「すまない、朝一番でサカキバラナ  
オの身元調べてくれ。剛志の友達だ  
……たぶん、高3。頼む」

○クルーザーが水飛沫を上げている(早朝)

風を切る潤。

舵を取る山本。

傍に落ち着かない直。

× ×  
キャビンで胡弓を奏でる千代子

を、描画する紗加。

の、お腹が鳴る。

紗加 「（照れながら千代子を伺う）」

千代子 「（笑っている）」

× ×  
潤、操縦する山本に寄りかかり、

潤 「もっと、もっと出せ！全速力だ」

山本 「んなこと言っても、目一杯です」

潤 「クソッ！いつ着く？」

山本 「16時間後には」

胸ぐら掴んで、

潤 「何だと～。ふざけるんじゃないねー」

山本 「は、離してください」

離す。

山本 「ふざけてません。掛かるんですか  
ら、しょうがないでしょ」

潤 「マジかよ！」

山本 「で、燃料どうするんですか？」

潤 「えっ、何、云ってんだ」

山本 「だから、燃料が足りません」

咄嗟に殴る潤。倒れる山本。

直、慌ててスロットルを切る。

山本に馬乗りになり、

潤 「クソったれが、今更、何云ってんだよ。このマヌケ！」

潤、引っ叩く。

潤 「何で、最初に云わなかったんだ」

山本 「だって、判ってるかと……」

潤 「（胸倉を抑え込む）テメェー」

山本 「ウーッ、苦しい……」

直 「潤さん！」

潤 「（向き直り）潤さん……？」

直 「（頷く）そう……」

潤、山本を放す。

山本 「ハー……」

潤 「直よ（近寄り）そうだよな…潤さん、ってか……潤さんね。で、どこまで行ける。ヨットマンよ！」

山本 「この船だとだいたい、今、このラインだから……満タンの量によりますが……」

潤 「で、どうなんだ！」

山本 「で……」

直 「満タン、500リッターです」

潤、振り向く。

直 「多分」

潤 「直、確かか？」

直 「ツーリングって云ってたからさ」

山本 「だったら八丈島位なら……」

山本、何かを凝視。

潤 「！？」

潤、それに目をやる。

無線器（携帯又は備付け）である。

適当な道具（ハンマーやバール）を掴み、無線機を叩き壊す。

直 「ウワァ！何かあった時大変ですよ」

潤 「知るか！オイ、さっさとしろ！」

山本の手を、舵にロープで、グルグル巻きつける。

潤 「操縦しろ！」

スロットルを入れる山本。

直 「潤さん、遣り過ぎです！」

潤 「なんだと、直！」

直 「だから……」

潤 「オレは、逃げるんだ！判ってるか？でないと殺されるんだ！」

来ていた、

紗加 「潤！」

潤 「（振り返り）オイ、アイツは」

慌てて飛び出して行く。

× ×

キャビン。

キッチンで素麺の準備の千代子。

そろりと歩み寄り、

潤 「本当は喋れるんじゃないかねえか。お婆さんよ」

千代子 「！！ング（後ずさる）」

追って来た紗加、

紗加 「潤、よして！」

潤 「芝居してさ、逃げるチャンス伺っ

てたんじゃねえの……あのさ、無線機って知ってるよな」

詰め寄る潤。

千代子 「（首を振る）」

潤 「ぶっ壊してやったんだよ。だから

さ。もう、諦めな……お婆さん」

紗加、間に入り、ビンタを張る。

潤 「イテェなー」

紗加 「ナンかおかしいよ」

潤 「何だよ」

紗加 「直たち、呼んで来て」

潤 「チッ！」

× ×

湯上がった素麺を水で晒す千代子。

紗加 「おいしそー」

千代子 「（頷く）」

× ×

潤、紗加が描いた絵を見つける。

「千代子」である。

潤、二人を睨む。

× ×

海に漂うクルーザー。

素麺を食べる紗加たちと山本。

皆んなを見て微笑む千代子。

千代子 「？」

食べない潤。

潤にツユを勧める、千代子。

潤 「（睨み、その場を去る）」

千代子 「……」

紗加、傍に来て、

「放っとけばいいの」

千代子 「……」

激しく貧乏ゆすりしている直。

気付く、

山本 「?!」

絵を持って戻ってきた潤、

潤 「これ」

皆んなの前で掲げる。

紗加 「！」

破る。

紗加 「（睨み付ける）」

潤 「遊びじゃないんだ」

紗加、拳を握りしめている。

直、貧乏ゆすりを止め、箸を置き、

潤の元へ行き、

直 「スマホ、どうして捨てたの？」

潤 「?!」

紗加 「?!」

直 「スマホです。僕の！」

潤 「ジャマだからだよ。何トチ狂って  
んだよ」

直 「何ですか、何でジャマですか。

僕は、何もしないよ。ジャマじゃない！！」

突然、飛び掛かる直。

紗加 「直！」

潤を叩く。

が、即座にやり返される。

潤 「無理だよ、お前には。オレをヤん  
のわよ！」

直 「イヤだ！」

挑む直。

揉み合う二人。

紗加 「もう、やめて！」

止めに入り、纏れる三人。

× ×

山本、千代子に駆け寄り、

山本 「チャンスだ。逃げよう」

千代子 「!？」  
山本 「早く！」  
千代子 「(首を横に振る)」  
山本 「飛び込むんだ、海へ」  
千代子 「(否定)」  
山本 「泳ぐんだ。どうにかなる」  
千代子 「……」  
潤の声 「オイ！」  
振向き様、膝蹴りされ倒れこむ山本。  
潤 「坊ちゃんよ。次、変なことしたら、殺るからよ」  
山本 「ハアハアハア……」  
潤 「直、お前もだ！オレに、齒向かうな！」  
口から血を垂らし倒れてる直に、寄り添う紗加。  
紗加 「(潤を睨む)」  
千代子 「(一部始終見ている)」

○榊原邸・表 (遅い朝)

タクシーで帰ってくる由美子。  
黒パトから出る速水。

○ 同・中

昨日の置き手紙。

由美子 「！」  
探す。  
「直君、直君、帰ってるの？」  
由美子、スマホを掛ける。  
が、『…電源が入っていません』  
のメッセージ。

由美子 「……」  
チャイム鳴る。  
由美子、スピーカーフォンで、  
「はい、どちら様ですか」

速水声 「警察の者ですが」

× ×

応接テーブルで対面している、

速水 「昨日、直君とうちの息子が、一緒だった事は判ったんですが、何か心当たりはありませんか？」

由美子 「ええ、ありませんわ」

速水 「他にお友達は？」

由美子 「多分、居ないでしょう……直君は、小さい時から一人が好きみたいで……でもね、刑事さんの息子さんと一緒だったなんて、お友達、居たんですね。ウフツ」

速水 「?……」

由美子 「スマホ弄ってるあの子しか知らないの。私、すごく忙しくて、だから、直君のこと心配だったんですの。でも、安心しましたわ、お友達がね……」

速見 「いえいえ、そうじゃなくて」

由美子 「あら、すみません。そうだわ主人に聞いてみま（と改め）…ああ、やっぱり、やめときます。忙しく、飛び回ってますから、怒られますし、はい」

速水 「（呆れて）そうですか。何かお判りになりましたら、こちらに連絡下さい」  
名刺を渡し、

速水 「あの一、奥さん。心配じゃないんですか」

由美子 「刑事さんのお子さんもいらっしゃるンでしょ。それは、力強いですことよ」

速水 「何、云ってるんですか。もしやっ  
てこともあるでしょう……」

由美子 「もう！そんなこと、考えさせないで下さい。想像したくないの。よして下さいよ、刑事さん！その為の警察なんでしょ！」

#### ○浦賀南港高校・職員室（応接間）

松浦と担任の風間先生(52)。

風間 「それは守秘義務で……」

松浦、立ち上がり、

松浦 「暴れてほしいんか！センコーよ」  
狼狽える、

風間 「ひえ～！ちょ、ちょ、ちよつとお待ち下さい」

× ×

潤のクラスの名簿とメモを渡す、

風間 「これがクラス名簿で、こちらが田中紗加くんの住所です」

名簿の一点に目が止まる。

『速水剛志』

松浦 「(呟く) 速水剛志か……」  
風間 「なるべく、穏やかにお願いしま  
す。松浦さん」  
松浦 「そやのう、ありがとよ、先生」  
風間 「…… (苦痛) 」

○フラワーハイツ・田中家 (表・玄関)  
ドアが開き、

松浦 「助かった〜、ありがとよ」  
美津子 「あの子に会ったらお灸すえとつ  
てね (名刺出し) サービスするわよ」  
松浦 「そうかいね」  
美津子 「でも、ほんと、ヤクザよりヤク  
ザらしいんやね」  
松浦 「商売上ね。じゃ」

○黒塗りベンツが走っていく。  
ハンドル握る剣崎に、  
漆黒スーツの松浦、煙を吐き。

松浦 「センコーもセンコーなら、親も  
親だな。テメエの立ち位置くらいしっかり  
しとけよな！このオレを見習ってよう。な、  
そう思うだろ」  
剣崎 「はい！組長」  
松浦 「(呟く) 速見剛志……」

○学校・裏玄関・ロビー  
腰を折り、

風間 「あーどう言えばいいのか。ほんと  
うにお気の毒さまです。刑事さん。お察しし  
ます」  
速水 「先生。速水でいいですら、で、ど  
の様な事が……」  
風間 「つい今しがた、潤くんのお父さん  
がみえまして…ビックリしました。滅多に学  
校に来ないヤンチャな子なんですよ、潤くん  
は。そのお父さんが来るなんて、どうしたこ  
とかいなーと、思ってたところ、クラスの名  
簿が欲しいとせがまれてましてね。なにぶん潤  
くんのお父さんでもありますので、代わりに  
緊急連絡名簿を渡しました」  
速水 「潤くんの上の名は？」

風間 「ええ、失礼しました。松浦です。  
松浦潤です」  
速水 「松浦潤……」  
風間 「それと、あと、田中紗加くんの住  
所も伝えました。すみません……」  
速水 「田中紗加……」  
風間 「ええ、聞いて来たもんでね。私も、  
いけないと判っておったんですが、やはり怖  
くて……情けのうて…刑事さん、判るでしょ」  
速水 「……」  
風間 「こんな時に、刑事さん、すみません。  
いえいえ、速水さん、怖くて、とても、とても」  
校長が駆けて来て、  
校長 「刑事さん、お話、終わりましたか」  
速水 「ええ、ありがとうございます」  
校長 「本校も、緊急処置として、全生徒  
を下校させる事にしました。刑事さん、一刻  
も早く、解決してくださいね。お願いします」  
速水、一礼して、去る。

○学校・校門前

携帯に、

速見 「そうだ、田中紗加、至急、向か  
ってくれ」  
次々と、報道関係の車が集まって来る。

○フラワーハイツ・田中家（玄関）

美津子、紗加の携帯、持って来て、

美津子「ウフ、アンタ、若くてさ、いい感じ。  
アタシ好み・・・さっきと大違いね。はい  
どうぞ」

森田、受け取り、履歴を確認する。

【剛志、12:10発信・13時、図書館  
で待ってる】

【潤、10:05着信・14時30、第1緑  
公園で】

森田 「潤君の名字は判りますか」

美津子 「知らないわ……他、見ちゃダメよ、  
怒られるんだから。男からのメールきてんで  
しょ。ほんと、呆れるわ。ちよつ、ダメよ。  
(森田の手に触れ) ウフッ、ダメよ」

森田 「えっ！？……はい、もちろん」  
美津子 「刑事さん。ここに居るの（名  
刺渡す）遊びに来てよ。サービスするわよ」  
森田 「いえ、あの、今、工作中ですから、  
そのう、どうも、ありがとうございました」  
名刺を添え、携帯を返す。  
美津子 「あっ、そ。あ～あ、何やらかした  
んだか。あんね、2、3日、放り込んで  
、頼むわね。ジャーネー！」  
ボタン！

○神奈川南警察署・捜査一課

速水 「どうだった？」  
森田 「娘さんの携帯履歴から警部の息  
子さんには12時10分の発信で、13時に凶  
書館。潤って子に10時5分の着信で、14  
時半に第1緑公園で待ち合わせしていたこと  
が判りました」  
速水 「潤……（呟く）松浦……」  
森田 「しかし、警部、我々より先に動  
いてる奴らが……！」  
警官Aに導かれ、入って来る、  
松浦 「よう、速水！踏ん張ってるか？」  
速水 「（呟く）マツウラ」  
松浦 「オレんちの悪ガキ知らねえか」  
速水 「どういう事だ」  
松浦 「速水よ、お前も父親失格じゃね  
えか。息子のダチ、一人や二人知っとかね  
えとな」  
速水 「その一人がお前の息子か」  
松浦 「おお！知ってるじゃねえか。さ  
すが！だったら、挨拶ぐらいあってもいい  
んじゃない」  
速水 「お前こそ」  
松浦 「皮肉なもんだよな。親も親なら、  
子も子だ……同じクラスだ」  
速水 「そうか……」  
松浦 「お前の息子に会わせてくれよ」  
速水 「（目を背ける）」  
松浦 「知ってんだよ、お前さ  
んの息子がさ。ウチの悪タレの居場所をさ。

頼むよ。説教しないかんのよ」

速水 「（頷く）」

松浦 「おっ、そうか。父親って云うのも  
しんどいよな」

速水、行く。

#### ○同・検死室

屍体の前の速水と松浦。

速水、シートを捲る。

松浦 「（見据える）」

速水 「……（戻す）」

松浦 「すまん……残念なことだ……」

速水 「心臓に一発……一人息子だ。俺  
も探している」

松浦 「だろうな……」

速水 「剛志を殺った犯人を」

松浦 「アンタもわかんねえんだ」

速水 「松浦よ。ピストル持たしちやま  
ずいよな……」

松浦 「（睨み付ける）……速水よ」

速水 「……」

松浦 「一応息子だ。兄貴の子でもな」  
出て行く。

#### ○回想①

小学校、放課後の運動場。  
ジャングルジムの鉄柱の中、逃げる  
小3の速見と追う松浦。

松浦 「待て、速水！」

天ぺんに這い上がろうとした速見  
の足を捕まえる松浦。

松浦 「僕の勝ち！」

速見 「クソーッ。じゃ、松浦。次、僕、  
警官だからな」

× ×

② 大型スーパーの大駐車場。  
車に荷物を積んでいる速見（34・警  
部補）と、妻（32）。  
白龍組の2人が来て、速見を抱え、  
引き連れて行く。

速見 「なんだ！」

妻 「あ、あなた！」

西(35) 「刑事さんよ。よくもカシラの顔を潰してくれたよな。お礼参りしたくてさ」  
傍で、舞踊っている東、  
ナイフ手に、

東(28) 「エライやっちゃ、エライやっちゃヨイヨイヨイヨイ」  
駆けて来る、

妻 「あっ！」  
ナイフを投げる真似をする東。

速見 「来るな！」  
西に肘打ちを喰らわし、  
東のナイフを蹴飛ばし、  
妻の元へ駆けて行く速水。

妻 「あなた一つ、後ろー！」  
速水、振り返ると、  
西が2人に向けて銃を構えてる。  
妻を庇いに急ぐ速見。  
ドキューン！  
速見の顔を掠め、妻の胸を射る。  
倒れる妻、

速見 「(呆然)」  
西 「あら～、奥さんに当たっちゃった」

速見 「(振り返り、睨む)」

東 「フッヒャヒャヒャー」

西 「じゃ！」  
引き金を絞り込む。  
ドキューン！

西 「?.....ウッ.....」  
後ろを振り返り様、一発放ち、  
ドキューン！  
倒れ崩れる西。

速見 「!？」  
東 「フッヒャヒャー、ヒャヒャー」  
ナイフを翳し、飛び込んで来る東。  
速見、それを躲し、腕を振り上げ、  
ナイフを、東の胸に刺し込む。

東 「ヒャヒャアグーッ、グッ.....」  
倒れる東。

速見 「.....(振り返る)」  
松浦(34)が立っている。

松浦 「(手を掲げ)偶然だな.....」

速水 「そうか.....」  
松浦の背後を見ると、

松浦の義理の姉（元、松浦組組長、  
兄の妻・35）が血に染まっている。  
その屍体（潤の実母）に縋る潤（7）  
が泣いてる。

速見 「……」  
× ×

③ 解体中のビルの一室。  
速見の鋭い眼。  
ドアの陰から光っている。  
対面する数人の男達。  
中央に松浦。  
白い粉を吸い込み、頷く手前の男。

男 「オーケー！」  
松浦、頷き、ドアを見る。

速見 「（見ている）」

松浦 「（ウインク）」

速見 「……」

刑事B、来て、

刑事B 「どうですか？」

速見 「イヤ、今日は、まずい！」  
刑事Bの肩を抱え、その場を去る。

#### ○港湾南病院・病室

意識不明の正一郎。

見守っている速水。

速水 「剛志に何もしてやれなかった」  
ノック後、森田入って来て、

森田 「警部、剛志くんとお父さんに使  
われた銃は同じものと思われます。スミス  
&ウエッソンです」

速水 「で、拳銃の出何処は？」

森田 「多分、松浦組でしょう……」

速水 「頼む！」

森田 「（行き掛ける）警部、お母さん、  
必ず、助けます」

速水 「ああ……」

#### ○オフィス街

タクシーに乗り込む榊原。

森田声 「やっと会えましたね。榊原さん」  
振り返る、榊原。

森田、警察手帳を見せ、

森田 「お話したいんですが」

榊原 「時間ないんですよ……少しだけ  
なら」

× ×

陰で、伺う松浦組組員、橘。

○スタンド・カフェ

榊原 「そんなことになってんですか。  
忙しすぎるのも考えもんですね。直のこと、  
私に替わってよろしくお願いします」

森田 「!？」

榊原 「刑事さん必ず見つけて下さい」

森田 「ちょっと、待ってください、榊  
原さん、あなたの息子さんですよ」

榊原 「判ってます。だから、こうして」  
深々、礼をする。

森田 「一端、仕事を離れてみてはどうで  
すか？」

榊原 「ふ〜っ、それは……厳しいです」  
榊原のスマホ鳴る。

榊原 「なに！無い……いつ？（切る）」

森田 「!」

榊原 「じゃ、よろしいでしょうか」

森田 「どうしたんですか？」

榊原 「クルーザーが盗まれたんです」

森田 「クルーザー……」

榊原 「今朝、見たら、消えていたって。  
ちゃんと管理しておいてくれなきゃ、困っ  
ちゃうんだよな……つたく」

森田 「場所は」

榊原 「葉山マリンハーバー」

森田 「!？……」

榊原 「ああ、そうだ、刑事さん、探し  
てくださいよ！」

森田はすでに居ない。

榊原 「？」

入れ替わりに、橘が榊原の肩を抱き  
かかえ、

「さっきの立ち話、教えてくれよ」  
懐のナイフを見せる。

榊原 「!」

○港湾南病院・病室

微弱な心電図。

速水 「……じゃ、父さん、また」  
携帯がなり、出る、

速水 「クルーザー……葉山……」  
正一朗、喘ぎ始める。

速水 「すまん、後でかける。（顔を寄せ）何、父さん」

正一朗 「オガ……オ……サ……」

速水 「何ですか、お父さん」

正一朗 「オ…ガ、サ…ワラでイッショニ  
……チ、ヨ、……（絶える）」

心電図、平坦な線になる。

速水 「……（呟く）松浦、潤」

#### ○洋上

真っ青な海を突き進むクルーザー。

#### ○クルーザー・コクピット

舵を取る潤。

潤 「チャライじゃんかよ。坊ちゃん。  
タイガイにシテくれよ」

ロープでグルグル巻きにされた山  
本、隅で蹲っている。

山本 「でも、岸に着けるときとか」

潤 「今は関係ねえ」

山本 「荒波の時とか……」

潤 「うるせ〜、そんなときは聞く。え  
ーと（コンパス見て）……オイ、方角、い  
いんだな、これで」

山本 「ええ、いいかと……」

潤 「バカ、ちゃんと見ろ！」

山本 「（立ち、見る）はい、いいです」

潤 「座れ！」

悠然と舵を握る、

潤 「直、順調じゃん」

直 「……」

風を切るクルーザー。

#### ○葉山マリンハーバー

ランクルを調べてる速見と鑑識。

黒ベンツから降り、来る松浦。

迎える速見。

速見 「よく判ったな」  
松浦 「今は情報に取り残されては生きてられねえからよ」  
速見 「松浦よ、息子と遊んだことあるのか？」  
松浦 「ない」  
速見 「お前、一応、親だろ」  
松浦 「兄貴の子だ」  
速見 「判ってる」  
松浦 「兄貴はイカしてた。アタマ廻って、やる事は早い。ヒーローちゆうんかいな、組長、組長、組長って、皆んなに慕われてたよな……だから、比べるなって云ってもよ」  
速水 「で、憎いのか……」  
松浦 「……顔を潰しやがった」  
速見 「まだ、17歳、子供なんだ」  
松浦 「習わしだ」  
速見 「そうか……」  
松浦 「そうだ」  
速見 「……潤くんが銃を……」  
松浦 「証拠あるのか」  
速見 「お前だよ」  
松浦 「……」  
速見 「倅を殺りたいんだろ」  
松浦 「……」  
速見 「だからだ」  
松浦 「……俺が先に捕まえる」  
速見 「いいや、罪を償ってもらおう」  
松浦 「……」  
速見 「一緒にな、松浦」  
松浦 「おもしれえ。ほんじゃ、お前の後についていかしてもらおうぜ」  
速水 「……」

○洋上を飛んで来るヘリコプター

○クルーザー・キャビン

寝ていた直の目から落ちる、涙。  
紗加が覗き込み、

紗加 「直？」  
慌てて拭い、顔を隠す直。

紗加 「……大丈夫？」  
直 「ああ……」  
紗加 「（千代子に）おばさんは？」  
千代子 「（頷く）」  
紗加 「良かった……私……」  
横になる紗加。  
千代子、二人の背を摩る。

○ヘリコプター

遙か遠方のクルーザー、スコープが  
捉える。  
操縦士 「クルーザー、発見。北緯、34度  
6分8秒。東経、139度43分39秒」  
声 「様子を見てくれ」  
操縦士 「了解」

○クルーザー・コクピット

聞こえて来るプロペラ音。  
潤 「!？」  
山本 「！」  
潤 「ジッとしてろよ！」  
スロットルを切り、デッキに飛び出  
す潤。  
× ×  
千代子 「！」  
紗加 「！」  
直 「！」  
× ×  
ロープをなんとかしようと思死の  
山本。  
× ×  
ブロロロー、  
真上でホバリングのヘリ。  
× ×  
デッキ。  
潤 「クソッ！」  
見上げ乍ら出てくる、紗加、直、千  
代子。  
潤 「どうことだ！」  
直 「父さんが気付いたんだ」  
潤 「やべえなあ……」

紗加 「潤、もう、自首しかないよ……」

潤 「うるせ〜、行き先は知っちゃい  
ねえよ」

紗加 「もう、無理よ、逃げられない」

潤 「やってみなきゃ判んねえだろ」

紗加 「直は……」

直 「……」

紗加 「何か云って！」

直 「潤の云う通りにするしかないよ」

紗加 「……」

千代子 「……」

× ×

操縦士 「クルーザー、只今、停泊中。デ  
ッキに高校生と思われる男性2名、女性1  
名、年配の女性が1名、見た限り、特に大  
きな傷を負っている者はいません」

声 「判った、戻ってくれ」

操縦士 「了解」

× ×

千代子、へりに向かって、大きく手を振り始める。  
が、へりは飛び去っていく。

潤 「やめろ！」

と、千代子に飛び掛かる。

× ×

山本が縛られたまま、スロットルを急に入れる。

× ×

船体がグラッと激しく揺れる。

一同、倒れる。

× ×

山本、ハンドルをグルグル廻し、廻  
し切ると、即座に反対に廻し始める。

× ×

一同、左右に身体を振り回される。

潤 「クソッ〜！」

よろけ乍らコクピットへ向かう。

× ×

遠のくへり。

× ×

コクピット。

潤 「何、してんだ。このヤロー」

飛びかかる潤、  
身体を使い舵を取る山本を掴み、羽

交い締めで締め上げる。

山本 「ウッ……苦し……息が」  
慌てて来た紗加、潤を止める。

紗加 「死んじゃう。ダメ、潤」  
続く直、慌ててスロットルを切る。  
千代子、潤の髪の毛を掴み、振り返らす。

潤 「何だ！」  
腕が緩み、山本ズリ落ちる。  
千代子、潤を引っ張り、山本のロープを解けとジェスチャーする。  
潤、逆に山本を蹴り出す。

山本 「ウグッ！（薄笑い浮べる）……」

潤 「何、笑ってんだよ。その目は何  
なんだ！オレをバカにすんな！この～～」  
再び、千代子、割って入り、抵抗。  
潤、千代子の強さに怯む。  
睨みつける潤、拳を震わせている。  
睨み返す、千代子、掌を挙げる。

潤 「遣ってみな！」

紗加 「！」

直 「！」

千代子 「……」  
掌を握り、下ろす。

潤 「来い！」  
千代子をデッキに引き摺り出す。  
転ぶ、千代子。  
千代子を庇う紗加と直。

紗加 「何、すんのよ！」

潤 「裏切んなよ」

紗加 「……」

直 「……」

潤 「ウロウロさせんじゃねえ！縛  
れ！」

紗加 「縛っちゃダメ！」

潤 「だったら、出しゃばらすな！」

紗加 「潤、落ち着いて。今は助け合わ  
ないと」

潤 「何言ってるんだよ。俺ら、逃げて  
んだ。人殺して、逃げてんだぜ。ゆとりな  
んかねえよ。アップアップなんだよ！」

直 「僕は何もしてないです。潤さん

一人でやったんです！」  
潤 「なんだと！」  
潤、飛び掛かり、馬乗りになり、  
潤 「直、お前も一緒だ。裏切んな！」  
ガタガタ震えてる、  
直 「潤さん……」  
潤 「……」  
直 「もういいです。好きなだけ殴っ  
てください（目を閉じる）」  
潤 「！」  
紗加 「……」  
千代子 「……」  
潤、拳を高々と上げる。  
その手を握る、  
紗加 「潤、やめて！このままじゃダメ」  
潤 「……クソッ！（紗加を見る）」  
紗加 「（頷く）……」

○巡視艇（20メートル型）

青い海を突っ切って行く。  
森田、携帯を閉じ、速水の元へ、  
森田 「警部！東京海洋大、ヨット部、山  
本、3回生、合宿中、葉山マリンハーバーで  
行方不明とのことですよ」  
速水 「（頷く）……」  
× ×  
浮かれたバカンス気分の、  
榊原 「やっぱ、早えーな」  
と、船内をウロウロ。  
榊原 「休んだけど、価値あるな……」  
傍の、  
由美子 「直くんのこと心配してるの？」  
榊原 「クルーザーよりもな」  
由美子 「（疑う）ほんと？」  
榊原 「じゃ（微笑む）君は？」  
由美子のスマホ、鳴る。  
由美子 「あら、ゴメンなさい（その場を  
去り）……ウーン、待ってたのよ」  
× ×  
美津子 「（森田に）嬉しいわ、また会えて！  
あたしね。恥ずかしいけど（囁く）フェラ得

意なの」

森田 「ああ！！失礼します（離れる）」  
美津子、残った男に寄り、

美津子 「あなたも私好み。今度、来てく  
ださる。ウーンとサービスしちゃう」  
と、保安士に名刺を渡す。

保安士 「はい、僕、行っちゃいます」  
見ていた速水、森田、海上保安士数  
名、呆れてる。

速見 「……ったく。皆さん、聞いてく  
ださい。これはバカンスじゃありません。  
皆さんの子供達の救出です。全身全霊で  
我々に協力してください。遊びじゃないん  
です」

親たち 「ふぁーい」

× ×

微動だにしない船長の側に来て、

速水 「やってられないですね」

船長 「全くですな。でも、警部補、大丈  
夫です。燃料切れも時間の問題です  
から。だだっ広い海の中、井の中の  
蛙ですよ。アハハハハハ」

速水 「だといいんですが」

船長 「（精悍な顔を向け、ウイंक）今  
晩、どうですか？久しぶりに（と飲む仕草）」

速水 「（啞然）」

汽笛（長音3回）が聞こえてくる。

速水 「！」

× ×

大漁旗の漁船が追い抜いて行く。  
黒着流しの組員が列を成して睨み、  
中央の松浦、雄叫びを上げる。

## ○海と太陽

胡弓が鳴いてる。

舵を握る、山本。

横で見張っている直、その手にはヨ  
ットマンナイフ（折畳み式）。

苛立ちが募り、

山本 「ウワァー、クソー！何とかしない  
と！ほんと殺されちゃうよ」

直 「……」

山本 「君はどうなんだ。スマホを捨てられるしさ、殴られるしさ」

直 「いい事ないです。でも、強いから……」

山本 「逃げないか？」

直 「逃げる」

山本 「アイツ、ドンドン、イラついてるジャン、このままだとヤベェじゃん。マジ、殺されちゃうよ」

直 「……で、でも」

山本 「どうなんだよ」

直 「でも、本気で僕に向かってくる」

山本 「当たり前だ。身、守るためだ」

直 「パパとママは、僕をはぐらかす」

山本 「……だったら、僕を逃がしてくれ」

直 「逃す？」

山本 「あのさ、このまま行けば、御蔵島ってあるんだよね。見えたら、キーを抜いて、飛び込んで逃げる。だから、黙っていてくれ」

直 「でも、分かったら……」

山本 「大丈夫、君は仲間だ。けど、僕は違う。殺される。そんなのイヤだ。分かってくれ、そうだろ」

直 「……（頷く）」

山本 「逃げれたら、警察に連絡してあげるよ」

直 「見つかったら知らないよ」

山本 「大丈夫だ、さっき、結構、イカしてたぜ！」

直 「えっ！」

山本 「あのさ、島が見えたらさ、紗加ちゃんだっけ、彼女に『好きだ！』って抱きつくんだ」

直 「ええ、今、何って……」

山本 「君、彼女のこと好きなんだろ。だからさ。判るよ、見てて」

直 「で、まあ……で、でも」

山本 「ヤツも大好きなんだろ。だからさ。僕のことなんか忘れちゃうよ」

直 「そんな、僕、やられちゃうよ」

山本 「殺しはしないよ、きっと」  
直 「ええ、そう云っても」  
山本 「僕の命が懸かってるんだ。お願いだ。助けてくれよ」  
直 「ええ、まあ……」  
山本 「だったら、そのナイフもしまってくれよ。僕は、その時まで何もしないで、静かにしてるからさ。約束する」  
直、ナイフを見る。  
山本 「突きつけられてると、いい気しないんだ。そうだろ」  
直 「ええ（仕舞う）」  
紗加の叫声が上がる。  
「キャー！！」  
直 「山本さん、船、止めてください」  
飛び出ていく。  
× ×  
キャビンの片隅で千代子が縛られ、その死角では  
下半身剥き出しの潤が裸の紗加に、跨って蠢いている。  
抗う紗加。  
直、躊躇し立ち止まる。  
紗加 「ナ、ナオ～、誰か～」  
潤 「紗加、静かにしてくれ。頼むよ」  
紗加 「お、お願いだから……」  
直、手にしていたヨットマンナイフを出す、  
直 「……」  
が、傍のテーブルに置き、潤を掴み、引き離そうとする。  
直 「や、やめて下さい」  
潤、振り払い、  
潤 「ナンなんだ。邪魔すんな～！」  
と直を殴る。  
直 「いけない。ダメです」  
潤 「ウッセー！最後なんだよ。最後だからよー！」  
飛びかかる潤。抗う直。  
× ×  
山本、様子を確認し、忍び込む。  
目線が合うと千代子のロープを解

き、テーブルに置かれた例のナイフに気付く。

取りに行きたいが、行けない。

× ×

隅に縮こまり震えている紗加。

血だらけで蹲っている直。

潤 「(息切れ) ハア、ハア……直、判るだろ。もう、最後かも知れねえんだよ。判ってくれよ……」

直 「(睨んでいる)」

潤 「紗加もさ、いいだろ……」

紗加 「(首を振り続けている)」  
そこへ、千代子来て、潤に紙を掲げる。

【止めるの！】

潤 「な、何で、お前が!？」  
続いて、山本がナイフを翳し、迫って来る。

山本 「くそー！」

潤 「!!」

千代子 「!!」

山本、潤の喉元にナイフを充てがい、

山本 「お。お前、静かにしろ!直くん、彼をロープで縛ってくれ！」

直 「ええ!？」

山本 「早く!死にたくないだろ」

潤 「直、止めろ、仲間だろうが。直!」

山本 「こんなヤツ、仲間じゃない」

潤 「き、貴様、勝手な事するな!」

直、立ち上がる。

千代子 「……」

紗加 「直くん……」

直、ロープを潤の身体に架ける。

山本 「直くん、そうだ。そう、ゆっくりでいいからね」

潤、大声で叫び、

「ナオーー！」

山本に体当たり。

ナイフはすっ飛び、直も山本もブツ倒れる。

潤は山本を容赦なく蹴りまくる。

腰を曲げ、崩れ落ちる山本。

潤 「今度、また、勝手な事しやがっ

たら、撃ち殺してやる。おぼはんもだ」  
と、振り返った時、  
千代子、拳を上げ、睨んでる。

潤 「何だよその手、早くやれよ！」

千代子 「（睨み続けてる）」  
震える拳、だが、やがて、落とす。

潤 「直。オメエがちゃんと見張ってね  
えから、こんな事になったんじゃないか。  
勝手に持ち場を離れてよ」

直 「叫んでたからさ……」

潤 「ウッセーな。お前には、関係ねえ  
んだよ。判ったな」

直 「……」  
ナイフを拾い、

潤 「これ。使い方、間違うな！」  
直に、渡す。

潤 「しっかり、頼むぞ。アイツを連れ  
てけ。オレは沙加と仲直りするからさ」

沙加 「来ないで……」  
歩み寄る、  
潤を振り返らす、千代子。  
再び、差し出す紙。  
『山本くんはこの船の操縦士。  
必要です。仲間です。  
自由にして上げて』

潤 「！！」  
潤、爆発。  
辺り構わず室内の物をぶち撒ける。

潤 「テメエ！いつからリーダーにな  
ったんだ。お前は人質だ。そいつもだ。黙  
ってる。何で自由にしなきゃならないんだ。  
いずれ、殺すんだよ。こいつが、俺の居所、  
喋ったらどうなる。捕まるんだ。お前もそう  
だ。着いたら殺す！」  
山本、固まっている。

直 「……」

紗加 「もう、これ以上、殺しちゃダメ。  
そんなことしちゃ（泣いてる）」  
潤、千代子に迫り、

潤 「オレはな、あんたを誘拐し、且  
那を撃った。それにさ、剛志っていうダチ  
も撃ち殺した、そいつさ、速見っていうん

だよな。そう言えば、あんたと同じ速見だよな。おばさん、その速見剛志って知ってるか？速見さんよ」

千代子 「！……（涙が滲む）」

紗加 「！」

直 「！」

千代子 「（その目で睨み付けている）」

潤 「……だろう、ダメ押しジャン。だからさ、こんな俺がさ、上品に生きてイけるワケねえだろ。これ以上殺すなって。そんな事云ったってよ、二人も殺ってんだよ。今更何だって言うんだよ。気取ってんじゃねえんだよ、おばさん。綺麗事云ってさ」

千代子 「（目を見開き）」  
怯まず、潤に大きなビンタを張る。

潤 「……」  
睨み据える千代子。  
拳を掲げるが止め、  
海に飛び込む潤。

千代子は直、山本の手当てをし、  
紗加に寄り添い、抱いてやる。

紗加 「あたいが守ってあげるから。心配しないで」

千代子 「（微笑む）」

○海に浮かぶ、

潤 「……」  
× ×

回想 松浦（34）が潤（7）を柱に縛り付け、  
「恥を欠かすな！」  
と頬を張る。口元から血が垂れる。  
「晩飯抜き！」  
傍で牛肉を食らう松浦。  
頭を垂れ、震えている潤の母（35・松浦の兄の妻）。  
松浦を睨みつける潤。  
潤を見る母の目に滲む涙。

○クルーザー・キャビン

直 「山本さん、大丈夫ですか？」

山本 「ああ……直君、今がチャンスじ

やん！」

直 「!？」

紗加 「!？」

千代子 「!？」

直 「……それは出来ません」  
山本、直に不意打ちを喰らわし、身体を弄る。

山本 「ナイフ、持ってたよね」

○海に漂う、

潤 「……」

× ×

回想 女と性交する松浦。

女 「なんとかならないあの子」

松浦 「放っとけ」

妻の遺影の前で昂る二人。  
押入れに隠れ涙を堪えている潤  
(8・小3)。

○キャビン

3人の前でナイフを翳し、

山本 「もう、うんざりだ。アイツに殺される！」

と、出て行く。  
追う、直。  
続く、紗加と千代子。

× ×

コクピットに飛び込む、山本。  
だが、キーが、

山本 「無い!?(抜かれている)」  
来た直も、それに気付く。

直 「……山本さん！」

山本、押し退け行く。  
が、来た紗加と千代子に目が合う。

山本 「ジャマしないでくれ。お願いだ」

× ×

山本、救命胴衣と救命ゴムボードの準備をする。  
直、ゆっくりと近付き、

直 「山本さん……海のど真ん中です。  
無理ですよ」

山本 「近寄るな」

直 「遭難します。死んじゃいます……  
行かないで下さい」

直、静かに寄って行く。  
直の傍に寄り添って行き、

紗加 「直、無理しないで」

直 「山本さん……えーと、山本さん、  
悪いと思っています。だから、お願いです  
……一緒に帰りましょう」

とナイフを持っていない手を握ろう  
とする。

山本も震える手を差し伸べる。

山本 「あいつがいる、あいつが……」

直 「（見つめ、頷く）」

紗加 「大丈夫、そんな事しないから…」

直、彼の手を握った瞬間、山本に引  
き倒され、その勢いでツンのめる。

紗加 「直！！」

替わりに、紗加が、そこ（山本の正  
面）へ、飛び込む恰好になる。

瞬間、紗加の腹にナイフが抉りこむ。

紗加 「アッ！」

山本 「！」

千代子 「！」

膝を落とし屈つ伏す紗加。

振り返って気付いた、

直 「サヤカ！！」

真っ赤な血が拡がっていく。

山本 「僕、僕は悪くない」

握っていたナイフを捨て後退する。

直、紗加を抱きかかえ、

直 「紗加、死んだらダメ。死んだら  
ダメです」

紗加 「直、ごめんね、誘ったりして…」

直 「僕、紗加に会いたかったから、  
いいんだよ……嬉しかった」

紗加 「直も、潤も、剛志も、皆んなア  
タシのこと、見てくれて……ありが……と  
う……」

直 「サヤカ～！」

紗加 「死んじゃうの……死んじゃう…  
…やっと……いい……かも、ね……」

○回想

悶える美津子(36)の上で蠢くクールな青年(28)、  
覗いてる紗加(高1)の目を射る。

× ×

喘ぐ紗加。

青年 「紗加もやるね。好きなんだ」

× ×

美津子、紗加をビンタ。

美津子 「何すんだよ、このろくでなし！」

紗加 「私、ピチピチして柔らかいって」  
更に往復ビンタを張る。

美津子 「バカバカしい。勝手にしな！」  
行く。

紗加 「(涙) バカよ、お母さんなんて…」

○元のクルーザー

直 「な、なんでだよー、サヤカ！

千代子 「(覗き込み、囁く) 紗加ちゃん…」

喘ぎながら息絶える紗加。

直 「ウォーーーー！」

千代子 「(項垂れる)」

救命胴衣の着用、救命ゴムボードの準備に手こずっている山本。

山本 「ハッ、ハッ、ハッ……」

× ×

戻ってきた潤が呆然と立っている。

潤 「!？」

駆けて来て、紗加を抱き、

潤 「紗加！紗加！紗加！……あいつ

か、あいつはどこだ！殺してやる！どこだ！」

ゴムボードを漕ぎ出す、

山本 「ハーハーハー……」

海に浮かぶ山本を見ている、

直 「……」

直の視線の先を辿る、

潤 「殺してやる〜！」

海に飛び込む、潤。

千代子 「(叫ぶ) あー、う、じゅ、よすの！」

アッという間にボートに乗り込み、

山本を滅多打ち、

喘ぐ山本。

潤 「殺してやる」  
大きな一撃を打つ。  
項垂れる山本。

直 「いけない！」  
と、泳いで来た直、潤を引き摺り、  
海に落とす。  
山本と共にボートも転覆、  
直、戻そうとする。止める潤。  
抵抗する直。水中で苦しくなり、腕  
がく潤と直。  
離れていくゴムボート。  
どんどん離れていく。  
× ×  
海の真ん中に浮かぶクルーザー。  
潤、直、喚き合ってる。

直 「何で、殺すんです」

潤 「直、お前こそ、紗加、何で助けな  
かったんだよ」

直 「しました。しましたけどさ」

潤 「嘘だ。死んじゃってんじゃねえか  
よ」

直 「もう、殺すのはヤメテ下さい！」

潤 「何でだよ！」

直 「何で、何で、僕は、助けられなか  
ったんですか……僕は紗加を……」

潤 「何とかしろよ」

直 「したんです……でも……」  
感情が高ぶり、狂乱状態。  
千代子、二人の頬を叩き、叫ぶ、

千代子 「お・ち・つ・く・の……」  
声が出た。

潤 「!？」

直 「!？」

千代子 「そう、おちつきなさい」

直 「……こ・え」

千代子 「そう、そうね。だから、落ち着  
いて、二人とも」

○風いだ大海原に沈んでいく紗加の屍体  
深く深く。  
胡弓の音色が重く鳴いている。  
いつまでも海を眺める潤と直。

胡弓を弾く千代子。

× ×  
デッキテーブルで頂垂れている、  
潤と直。

千代子、二人の手を取り、強く握り  
締める。

2人 「！」

そして、微笑み、

千代子 「（深呼吸して）……剛志は私の可  
愛い孫だった」

潤 「！」

直 「……」

千代子 「そして、夫……悔しい、許せな  
い、辛い、殺したい……」

潤 「！！！」

潤、手を振り解く。

直 「……」

潤、席を外し、右往左往し出す。

千代子 「（囁く）殺す、殺す、殺す、殺す、  
殺すって、潤！」

立ち止まる潤。

潤 「じゃ、オレを殺れ！」

千代子 「潤、殺すって気軽に言うんじゃ  
ないの」

潤 「……」

千代子 「自首して償うの。生きて償うの！  
逃げないで！」

潤 「もう無理だ、オレは、アイツも殺  
ったんだよ」

千代子、歩み寄り、潤の頬に往復ビ  
ンタ！

パン！パン！

千代子 「逃げないで！」

潤 「おばさん……」

千代子 「……」

潤 「おばさんのビンタ……」

千代子 「？」

潤 「痛えよ」

千代子 「……辛いけど……逃げないで」

潤 「……」

○速見率いる巡視艇と松浦率いる漁船が競り合  
ってる。

行方を見守る親たち。

美津子 「警部さーん、負けないで〜！」

速水 「（呆れてる）」

× ×

松浦漁船が急接近。

× ×

グラッと船体、大きく揺れる。

美津子 「（叫ぶ） モー！ 寄らないでよ！」

スカート、チラッとたくし上げる。

ピンクのTバックが露わに！

× ×

黒着流しの組員の列、乱れる。

○突き進む松浦組漁船

水平線を凝視する松浦

の、携帯がなる。

松浦 「はい、心配無用です……必ず」

目が険しくなる。

○回想

松浦の上で悶えてるキム（33・星流  
会ボスの愛人）。

キム 「アー、ハーン……！（止まる）」

背中に銃身が突き付けられ、  
振り向いた瞬間、弾き飛ばされるキ  
ム。

跳ね起きる、

松浦 「！」

3人の組員の間からクールな顔が覗  
く。

ストライプスーツの清楚な男、星流  
会ボス、無限（36）。

無限 「松浦さん、ええ気持ちでしたやろ  
？」

ベッドで、正座し、

松浦 「はい、いえ、申し訳ござんせん

でした。云い訳しません。何なりと……」

無限 「本当は、殺りたいところですが。

わたくしも、この女には、丁度、飽きてき  
たと申しませうか。魅力が感じられなく

なりまして……」  
キム、無限を睨む。  
無限 「！」  
瞬間、顔を蹴り上げる。  
キム 「アウツヴ！」  
吹っ飛ぶ。  
松浦 「！」  
無限 「松浦さん、付き合いのよしみで  
す。差し上げます」  
松浦 「！」  
無限 「条件があります」  
松浦 「はい、何でしょうか」  
無限 「チャカ、半ダースを綺麗に捌い  
てください。それだけです」  
松浦 「それだけですか？」  
無限 「しくじりましたら、消します」  
松浦 「(頷く)」  
無限 「松浦さんとキムと……」  
松浦 「……」  
無限 「潤くん」  
松浦 「……」  
無限 「消します」

○元の松浦組漁船

松浦 「……」  
組員声 「親分、親分……」  
松浦 「(聞こえていない) ……」  
組員、耳元で、  
「オ・ヤ・ブ・ン！」  
松浦 「！！ナンだ、うるせえ野郎だ！」  
組員 「抜かされました。あそこです」  
松浦 「お前は、アホか！抜かされりゃ、  
抜き返しちやいいじゃねえか。しょうもない  
ことを一々云うんじゃねえ」  
組員 「スピード限界なんで」  
松浦 「何！軽くするんだ！要らんモン  
捨てろ！」  
組員 「へイ！」

○水飛沫を上げて進んでいく巡視艇

速見 「……」

○回想

大型スーパーの大駐車場  
撃たれた妻、優子(32)を抱きかかえ、  
項垂れている速見(34)。

「……」

× ×

速見 「……松浦、すまない（溜息）」

松浦(34) 「お前こそ」

兄の妻(35)に縋り付き、泣く潤(7)。

「（松浦を叩き）母ちゃんを返せ、

返せ……」

松浦 「うるさい！」

と、撥ね付ける。

転ぶ潤、睨み付けている。

松浦 「兄の子だ」

速見 「……」

松浦 「オレを嫌ってる。兄貴とは大違

いよ。速見、学校の勉強はしとくモンだな」

○元の巡視艇

速見 「……」

× ×

漂うゴムボート。

× ×

榊原 「あっ！」

速水 「！」

榊原 「僕のだ！」

× ×

顔を背ける、

榊原、由美子、美津子。

漂うボートに絡まった山本の顔が

腫れ上がってる。

速見 「……」

森田 「警部、へり出しますか？」

速見 「動揺させたらマズい」

森田 「……」

速見 「（振り返り）皆さん、間もなく、

お子さんと会うことになるでしょう。あく

までも冷静に、暖かいお声かけをお願いします

ます。子供たちを動揺させたくありません。

お願いします」

榊原 「……」  
由美子 「……」  
美津子、場を離れ、海を眺める。  
美津子 「……」

○回想

青年(28)の上で喘ぐ紗加(高1)。  
紗加 「アーーーーン」  
× ×  
美津子(36)、紗加をビンタ。  
紗加 「私、ピチピチして柔らかいって」  
更に往復ビンタを張る。  
美津子 「バカバカしい。勝手にしな！」  
背中を睨みつける、  
紗加 「バカよ、お母さんなんて……」

○美津子 「……」

○御蔵島 (八丈島の手前の島)

沖、100m当りに停泊のクルーザー。  
舵を取る、  
潤 「降りてくれ」  
スロットル止めて、  
潤 「直、これ」  
スマホを見せる。  
直 「！」  
潤 「使ってくれ」  
直 「持ってたんだ！」  
潤 「(頷く) けどよ、1回使わせてれ」  
デッキに出て行く。  
直 「……」

○松浦

スマホを見て、充がう。  
(潤、松浦のカットバック)  
潤 「御蔵島で待ってる」  
松浦 「判ってんのか。タダじゃすまね  
えぜ」  
潤 「ああ……アンタを殺す」  
松浦 「！……」

○元のクルーザー

潤 「おばさん！ここで降ろす」  
千代子 「いいえ。潤ちゃん、やり直すの」  
潤、千代子に無理矢理、救命胴衣を着ける。  
抵抗する千代子。  
千代子 「主人と孫のこと償って」  
黙々と胴衣を着ける潤。  
ビニールで包んだ胡弓を持って来る直、黙って見ている。  
千代子 「死んだ紗加ちゃんどうなるの。  
無駄にしちゃ駄目！」  
直 「……」  
潤 「紗加はあれで良かったのかもしれない。こんな世の中とおさらばできてさ」  
千代子 「私も協力するから、やり直すの」  
潤 「そんな事が重いんだよ。もう、  
疲れたよ…紗加にも悪いじゃん。一人で行かしてよ！」  
直 「……」  
千代子 「潤ちゃん……」  
潤、無理やり、浮き輪を千代子に被せ、直共々、二人を海に落とす。  
千代子を傍に抱え、見上げる直。  
潤 「これ」  
直に胡弓を渡す。  
直 「潤……」  
潤 「なあ、直、気になってたんだよ」  
直 「なんですか」  
潤 「それだよ、もう、タメ口でいいからよ」  
直 「……」  
潤 「同じ17才だからよう」  
直 「そうだよね」  
潤 「じゃねえだろ」  
直 「そうかよ」  
潤 「(微笑む) じゃ」  
直 「じゃ」  
千代子を引き、陸に向かう。  
眺める潤。  
× ×  
搔っ攫った銃を見つめている潤。

棧橋に千代子を休ませ、電話の直。  
(以降、直と巡視艇はカットバック)  
巡視艇。

由美子 「！」  
スマホが鳴る。知らない電話番号。

由美子 「もしもし、どなた……直君？」  
反応する、榊原、速見警部一同。

由美子 「直君なのね……大丈夫？……平  
気なの……何か云ってよ直君！」

直 「……（無表情）」

由美子 「直君なんでしょ。黙ってないで、  
返事して」

直 「……」

由美子 「……直君……友達いたんだって。  
ママ知らなかった、ゴメンね」

直 「剛志君は？」

由美子 「え、ツヨシ君、ツヨシ君が……」

速水 「！」

榊原 「おい、話し過ぎだ、貸せよ」

由美子 「何よ！」

榊原 「早く、替われ！（取る）」

直 「（聞いている）……」

榊原 「もしもし、直か、でさ、クルーザー、  
大丈夫か？さっきさ、ゴムボート、屍体付  
きで浮いてたんだよ」

直 「……」

榊原 「だからさ、クルーザー、気にな  
ってさ……直……直……聞ってる？」  
黙ってる直。

榊原 「おい、直、大丈夫なんだろう？」

直 「（涙を浮かべ）知らないよ」

榊原 「ええ、なんだって」

直 「……ボロボロだよ！」

榊原 「どうするんだよ！」

直 「ナンだよ！クソオヤジ！」

榊原 「クソオヤジ……」

速見 「榊原さん、貸して下さい」  
取り上げ耳へ、充がう。

速見 「！（嗚咽聞こえる）」  
スマホに叫びてる、

直 「何が、クルーザーだよ！人が死  
んでんだよ。クソオヤジ！紗加も死んだん  
だよ」

速見 「紗加……」

直 「ワァーワァー、云ってる場合じ  
ゃないだろ。潤くんも苦しんでるんだよ…」  
聞いていた、

速見 「（呟く）潤。……もしもし、直  
君かい？」

直 「！？」

速見 「君たちを助けに来た。警察の速  
見です。教えてくれないか、今、どこなの  
？それと、おばさんも乗ってるかな」

直 「速見……剛志君の……」

速見 「そう、剛志の父親だ」

直 「ゴメン、ゴメン、ゴメン、ワザ  
とじゃないんだ……」

速見 「判った。直君、後でゆっくり話  
そう。それで、今おばさんは居るのかな？」

直 「はい、御蔵島に居ます（切る）」

速見 「御蔵島……もしもし、もしもし」

× ×

スマホを海へ投げ捨て、

直 「潤！」

と叫び、海に飛び込む。

潤 「直……」

立ち上がり、見つめて、

千代子 「（呟く）直……」

#### ○クルーザー

デッキで、直に手を借す潤。

直 「（頷く）」

潤 「（頷く）」

舵を取り、スロットルを入れる潤。

傍で見守る直。

沖へ進んで行く。

#### ○松浦組漁船

目を瞑っている松浦。

× ×

無限 「それまでは私の自由です」

と全裸で縛られたキムの乳頭を舌

でペロリと舐める。

× ×

目をカッと開く、松浦。

○巡視艇

双眼鏡を覗く船長。

「警部、発見しました」

と渡す。

速見 「（覗く）……」

島の栈橋を後にして、向かって来る  
クルーザー、暫くして止まる。

速見 「……」

○クルーザー

潤 「直、いいのか！」

直 「（頷く）」

潤 「……」

直 「僕も紗加のトコへ行く」

潤 「……」

搔っ攫った銃。

○巡視艇

速見 「ゆっくり進んでくれ」

船長 「了解」

再び覗く速見。

コクピットで動く潤と直の影……。

そして、栈橋に立っている千代子を  
捉える。

「お母さん……」

進む巡視艇。

デッキ前方、防護体制に入る森田、  
保安士達、後方に身構える親達。

○クルーザー

巡視艇を前方に捉え、

潤 「直！（銃を掲げ）これ？」

直 「使い方知らないから……」

潤 「そうか……直よ、ありがとな」

直 「潤は僕のことを……（涙拭う）」

潤 「何、云ってんだよ。似た者同士  
じゃねえか」

○御蔵島・栈橋

見守ることしかできない、  
千代子 「……」  
漂うクルーザー。  
低速で接近して行く巡視艇、  
脇から放たれる救助ボート。

○クルーザー～巡視艇～海上

精悍な潤と直。  
拡声器の速見の声。

速見声 「潤君と直君だね。君たちを助け  
に来たんだ」

巡視艇、止まる。  
(以降、巡視艇とクルーザーと  
カットバック)

速見 「だから、私の言う通りに行動し  
てくれないか。私たちは君たちには何もし  
ない。お願いだ。判ったら、デッキに出て、  
大きく手を左右に振ってくれないか？」

潤、デッキに現れ、叫ぶ、

潤 「イヤだ！オレは人を殺した！紗  
加も死んだ！もう、どうにもならない！」

美津子 「(呟く) 紗加……」

速見 「潤君、話し合おう」

背を向ける、潤。  
美津子が飛び出し、叫ぶ。

美津子 「ちょっと、アンタ！紗加を殺し  
といて何勝手なこと云ってんだよ！何様の  
積りなのよ！」

慌てて止める森田。

向き直り、

潤 「紗加を殺したのは大学生だ。オ  
レじゃねえ。オレじゃねえんだ！」

美津子 「紗加はどこ、どこなの？」

潤 「海に葬った！」

美津子 「サヤカ…… (涙が溢れてくる) 」

速見 「潤君。話を聞いてくれないか。

聞くぐらい、いいだろう」

潤 「……」

速見 「直君のご両親もいるんだ」

潤 「(直を見る) 」

速見 「そして、君の父さんは……」

× ×

漁船の汽笛が遠くからなり響く。

× ×

速見 「あそこだ！」

潤 「だから、なんだよ！」

速見 「私は……君を守る。直君はご両親  
に話をするんだ。なんでもいい、話そう……  
直君、黙ってないで、何かあるだろう？」

直、潤の横に立ち、両親を睨む。

直 「……（唇震えている）」

潤 「直……」

直 「（言葉が出ない）」

潤 「直の父さん、母さん。直に謝っ  
て欲しい」

直 「！」

両親 「！？」

潤 「直を放ったらかきにして来たこ  
とを、謝って欲しい！」

榊原 「なぜ、君みたいな殺人者にそん  
な事を言われなきゃいけないんだ」

由美子 「野蛮人は黙りなさい。バカバカ  
しい」

潤 「！」

直 「！」

潤、直の肩を叩き、

潤 「悪かった。行こうぜ」

直 「（叫ぶ）謝れ、謝れ、潤に、謝れ、  
謝れ……」

榊原 「冗談じゃない。謝ってもらいた  
いのはこっちのほうだ。直！お前もだ！」

由美子 「直君、なぜ、直君に指図されな  
きゃいけないの」

直 「父さん！アンタはクルーザーに  
狂った子供だ！」

榊原 「クルーザーは父さんの宝物なん  
だ、直！」

由美子 「なんて云う口の利き方、直君、  
謝りなさい！」

直 「うるさーい！母さんは……母さ  
んは、子供を捨てた女だ！！」

由美子 「まあ～、なんて恐ろしいことを  
…（黙ってしまう）」

美津子も 「……（顔を歪めている）」

速見 「（二人を制し）まあまあ、冷静に。

あなたたちが興奮してどうするんですか。

子供たちを興奮させてはダメですよ！」

蹲る直を庇う潤。

× ×

千代子の救助ボート、戻ってくる。

× ×

速見 「潤君、帰ろう。守ってあげるよ」

潤 「（叫ぶ）オレのオヤジはニセモ

ノだ。暴力好きで、女好き、どうしようも

ない犬畜生だ！そんな奴とは一緒に居たく

ない。母さんもアイツの為に苦しみ、死ん

だ」

### ○回想

肉を喰らっている松浦。

縛られた潤の傍で、

項垂れている母。

× ×

撃たれ死んでいく母、

「じゅん……」

縋り付き泣く潤。

近寄る松浦。

潤 「（睨み）あっち行け。イヤだ」

### ○元の海上

（同じくカットバック）

速見 「潤君！」

潤 「僕は剛志君を殺したんだ……ご

めんなさい！剛志くんのお父さん（涙が溢

れる）」

速見 「（目が潤む）……潤くん……」

× ×

巡視艇に乗り込む千代子、

榊原健一、由美子、田中美津子を睨

み付け、彼らの頬を張り、

息子、速見を見据る。

速見 「……（呟く）かあさん」

千代子 「情けない。あなたたちは、ホント、

子ども以下よ。」

汽笛と共に轟音が轟く。

追ってきた松浦が巡視艇に威嚇射撃。  
右往左往する速見たち。

速見 「避難！船内に、早く、逃げ！」  
瞬間、潤、直、コクピットに滑り込み、スロットル始動。  
巡視艇、方向転回。  
クルーザー、松浦の漁船に矛先を向けスロットル全開。  
身を乗り出す千代子。

速見 「（止める）母さん、危ない！」  
千代子 「（叫ぶ）ダメー、行っちゃダメー。戻るのよー！戻るのー！」  
突き進んでいくクルーザー。  
潤と直。

× ×  
（松浦漁船もカットバック）  
双眼鏡を覗く松浦。

松浦 「（外し）ニタリ！……テメェら、手加減するんじゃねえぞ」  
潤、銃を構え、松浦を狙う。  
松浦、再び双眼鏡を覗くと、

松浦 「！？」  
見える。狙いを定める潤が銃を絞るところを。

潤 「……（目が潤む）」  
絞りがブレる。  
ドキューン！

松浦 「！」  
腕が貫かれる。血が湧く。  
逆上する、

松浦 「撃てー、撃てー、生かしちゃおけねえ、撃てー……」  
組員、一斉射撃。

千代子 「じゅーん！なおーん！」

速見 「威嚇射撃始め！」

保安士 「警部、無理です！我々の前方にはクルーザーが！」

速見 「何してんだ！」

保安士 「面舵いっば〜い！」  
速度を上げ突入するクルーザー。  
松浦の執拗な銃撃。  
クルーザーに喰らう、夥しい弾丸。

身を隠し、スロットルを目一杯、上げていた潤と直。

松浦の漁船、

船長 「親分、突っ込んできますわ〜ど  
んどん、どんだん」

松浦 「ぶち当たる気や、野郎！」

船長 「取り舵、いっば〜い。急げ！」  
弾丸を込めた潤、直を見る。

直 「（頷く）」

潤 「（頷き返し）」

銃を投げ渡す。

掴み取る直。

そして、舵から手を放し、

二人、舳先へ駆けて行く。

千代子 「何とかして！！二人を助けなく  
ちゃー！！」

速見 「！！！」

舳先に駆けて来る二人を捉え、

松浦 「（ニタッ！）外すなよ！」

一斉に構える組員たち。

駆けてきた潤と直、雄叫びを上げ、

海に向かって高々と飛び上がり、

空に向かって銃を向け、

潤と直のモノローグが響く。

「失うものは何も無い。俺らが生きてたってろくな親にはならない。生まれてきた子が可哀想だよ！」

そして、撃ち放つ。

松浦声 「撃て！撃て！撃て！撃て！」

留まる事なく続く銃声！

その轟音の中。

叫び続ける、

千代子 「撃たないで！撃たないで！撃た  
ないで！……」

海に落ちるまでの僅かな時間に、

2人の身体が弾丸でボロボロになっ

ていく。そして、真っ赤な海に呑込

まれて行く。

立ち竦む、

千代子 「こんな、ばあさん残したってし

ようがないでしょ！！」  
クルーザー、爆発炎上！

○巡視艇と漁船

拍子抜けで項垂れている、  
榊原と由美子。  
見つめ合う二人。

榊原 「（涙が滲んでくる）」

由美子 「（泣き出す）」  
二人、抱き合う。

榊原 「すまん、直」

由美子 「ごめんね、直」  
蹲ってる美津子。  
今では、巡視艇と漁船、並走の形に  
なっている。  
松浦組員たちに、  
狙いを定めている速見たち。

速見 「（透かさず）撃て！」  
倒れていく組員たち。

× ×  
速見、松浦に狙いを定める。

速見 「……」  
引き金を握る。  
睨んでいる、

松浦 「……」  
速見、指を離す。

× ×  
逮捕された松浦、  
速見とすれ違う。

松浦 「ダラしねえ親ばっかだよな。な  
あ、速見」

速見 「子供も守れねえなんて」

松浦 「どうなっちゃうんだよ……」  
その時、松浦、グラッと崩れる。

× ×  
棧橋。  
漁師（無限）が素早く狙撃銃を  
仕舞い、去っていく。

× ×  
辺りを見回し、

速水 「おい、松浦……」

松浦 「こうなっちゃうんだ……よ」

速水 「……」

× ×  
海を眺めている、千代子。  
速見が歩み寄り、

千代子 「父さんも亡くなった」  
速見 「剛志も……」  
千代子 「ちよこって……云ってた」  
千代子 「（瞳に溢れる涙）」

遠い果ての海で、  
夕陽が沈んでいく。  
傷だらけの直も眺めている。  
クルーザーの板切れを掴み、  
波に揺れながら……。

終。